## 『今昔物語集』の読み替え(上)

## ―― 三宝感応要略録との関連において

「録との関連において ――

『今昔物語集』は一部に、依拠資料の読み替えをおこなったはな

1

別稿でふれたように、読み替えは目的をもってとられた措置であ

一義的には、『今昔物語集』を特徴づけるその組織を構成する

しを収めている。

ために用意されたものだとみられる。

根幹にかかわる重要な役割をになっているということになる。に用意されたものだとすれば、読み替えは『今昔物語集』にとって、織的であろうとした作品だ。したがって、その組織を構成するため織りであるうとした作品だ。したがって、その組織を構成するため、「一会情の語集」は、すぐれて組織的な作品だ。正確に言えば、組

物語集』をとらえようという発想が欠落していたからだ。理由ははっきりしている。従来の研究には、標題をとおして『今昔た。少なくとも、客観的で有効な読み替えに関する論はなかった。ところが読み替えは、これまでほとんど顧みられることがなかっ

宮

 $\mathbb{H}$ 

尚

ねらいをもって設定したものだ。 『今昔物語集』の標題は、すでに何度かふれたことがあるけれどれはあくまで結果であって、標題の付された目的ではない。

そが『今昔物語集』の標題の、最大の目的であった。釈が可能な話に標題で枠をはめて、解釈の一元化をはかる。これこえているのは、『今昔物語集』の組織化への強い志向だ。多様な解えているのは、『今昔物語集』の組織化への強い志向だ。多様な解

目を近付けて標題を観察することによって、これまで見落とされいた。「今昔物語集」は標題をとおして読むべきだ。まずは編者の構築しようとした世界をうかがい、そこを基点として、まずは編者の構築しようとした世界をうかがい、そこを基点として、まずは編者の標とようとした世界をうかがい、そこを基点として、無題の延長上に、編者の思い描いた『今昔物語集』がある。それ標題の延長上に、編者の思い描いた『今昔物語集』がある。それ標題の延長上に、編者の思い描いた『今昔物語集』がある。それ標題の延長上にいる。あえていえば、標題は編者そのものなのだ。

『今昔物語集』の読み替え(上) — 三宝感応要略録との関連において

題は検索に供せられるし、その面での利便性もおおきい。しかし、そ

『今昔物語集』の標題は、けっして無機質なものでない。たしかに標

(51)

して浮かびあがってくる問題のひとつだ。た問題が、あらたに見えてくるはずだ。げんに、読み替えも、そう

からとらえなおして導入したものであることを、『今昔物語集』は、ほぼ忠実に原話のそれを継承しながら、じつは原話とは違った角度読み替えは、もっぱら標題をとおしておこなわれている。本文は

標題で示しているのだ。だから標題に目を向けないかぎり、読み替

作するまでもない。
話を自由に改変する立場にたつ作品であったなら、あえて標題を操いで導入するとの方針を、『今昔物語集』がたてていたからだ。原読み替えを標題でおこなっているのは、原話をなるべくそこねなえに託した『今昔物語集』の試みがあかるみに出ることはない。

そのものを領導することさえある。になっている。付属物でないどころか、ときとしてそれは、はなしになっている。付属物でないどころか、ときとしてそれは、はなしの本体によりそい、それを補完しつつ作品を構築する重要な役割をの本体によりをい、それを補完してのではない。はなし

判断に誤りはない、と思う。

れにしたがうべきだ。これも『今昔物語集』の場合と同様、当該話の所収文献の編者のそとして、原話の読みが確定していなければならない。原話の読みは、ところで、『今昔物語集』の読み替えをいうためには、その前提

であるかを知る手がかりとなる。文献の編纂目的がはっきりしていれば、原話がいかに読まれたものば、願ってもない。また、たとえ標題は付されていなくても、所収ば、願ってもない。また、たとえ標題は付されていれん

『三宝感応要略録』はその意味で、『今昔物語集』の読み替えの

していえば、『日本霊異記』とならぶ、かっこうの検討資料だ。いる。『三宝感応要略録』は、『今昔物語集』の読み替えの問題に関れがもっとも重要なのだが、各話に内容をふまえた標題が付されてれがもっとも重要なのだが、各話に内容をふまえた標題が付されてれがもっとも重要なのだが、各話に内容をふまえた標題が付される実態を解明しようとするとき、かっこうの条件をそなえている。ま実態を解明しようとするとき、かっこうの条件をそなえている。ま

要略録』ばなれを試みている点についても、そこで指摘した。この無批判にしたがうのではなく、自己の世界を守るために『三宝感応のがその主旨であった。『三宝感応要略録』の影響下にありながら、のがその主旨であった。『三宝感応要略録』のそれの強い影響下にあるというでは、これもすでにふれたことがある。『今昔物語集』の標題は、ては、これもすでにふれたことが語集』との標題のかかわりについ『三宝感応要略録』と『今昔物語集』との標題のかかわりについ

者の標題を比較し、『今昔物語集』の読み替えの実態解明の一助とについても、踏み込みがたりなかった。以下、その反省をこめて両ゆれに思いいたらなかったし、『今昔物語集』の意図的な読み替えただ、不敏にしてこのときは、『三宝感応要略録』の側の標題の

2

したい。

標題と、各話に直接そえられた本文標題との二種がある。応要略録』の標題にも、各巻のはじめに一括してかかげられた目録『今昔物語集』に目録標題と本文標題とがあるように、『三宝感

いのある例が、わずかながらみとめられる。に、『三宝感応要略録』の目録標題と本文標題とのあいだにも、違はずだろう。ところが、これも『今昔物語集』のばあいと同じようは可一話に付された目録標題と本文標題とは、本来同じものである

れるものもある。留意しなければならないのは、とうぜん後者だ。いは、設定に際しての重点のおき方のゆれなどにもとづくかとみら較的単純な違いであるのに対して、その一方に、解釈のゆれ、ある物や土地の説明に精粗の差のみとめられるものもある。これらが比違いには、錯誤によるかとみられる文字レベルのものもある。人

中6─目・王氏感地蔵菩薩誦花厳偈排地獄感応

りあげられていない。

例をあげる。

中49 | 一目・踏大般若経所在地離悪趣業感応 | 本・○○○○○○○○○●●●●○○

目・会稽山陰書生写維摩経除疾救亡親感応

中 20

○印は両者に共通する部分であり、●印は一方に欠けている部分

本・00000●000●0●●●●●00

る。 なしに踏み込み、感応の中身を具体的に示そうとの姿勢をみせていなしに踏み込み、感応の中身を具体的に示そうとの姿勢をみせていー見してあきらかなように、これらはいずれも目録標題の方がは

『今昔物語集』の読み替え(上)―三宝感応要略録との関連においてたとえば、中6の目録標題は、主人公の王氏が、花厳偈を誦した

文標題とて、けっして不適正なわけではない。するように教えたのは地蔵菩薩であったことが知られる。だから本するように教えたのは地蔵菩薩であったことが知られる。だから本文標題はその点にはまったくふれず、地蔵菩薩の霊験譚だとの立場文標題はその点にはまったくふれず、地蔵菩薩の霊験譚だとの立場ために堕地獄をまぬかれたはなしであること示しているのだが、本ために堕地獄をまぬかれたはなしであること示しているのだが、本

れ、それが重要な意味をもっているのだが、本文標題ではそれがと他の例も、事情は大同小異だ、目録標題には営為の結果が提示さだ。
して救わられた王氏に焦点をあわせたかによって生じたものなのだ。
が。
かられた王氏に焦点をあわせたかによって生じたものなのだ。

いない。

も目録標題の方が、つねに感応の中身を具体的に示しているわけでなお、目録標題と本文標題とに違いがあるばあい、本文標題より

3

示す次のような例もある。はない。一般的には目録標題の方が詳しいのだが、逆のありようを

| 本・造釈迦像死従閻羅王宮被還感応上5 | 目・凝観寺法慶未畢釈迦像感応

上5の目録標題の示すところは、

法慶の作ろうとした釈迦像が未

可者の見まりるようのとよどによっている。これではのばられ、まであわせたか、造仏の結果に焦点をあわせたかの違いがあるのだ。徳で蘇りをえたと、その結果を明示している。 であわせたか、造仏の功能で蘇りをえたと、その結果を明示している。 それに対らわしたことを、言外ににおわせる仕組みになっている。それに対られしたことを、言外ににおわせる仕組みになっている。それに対られてあったことだけであり、にもかかわらず、その像が霊験をあ完成であったことだけであり、にもかかわらず、その像が霊験をあ

て生じたものだとは考えられない。その生因はおそらく、編者非濁であるにせよ、ともあれ右にあげたような差異は、単なる錯誤によっ目録標題と本文標題と、はなし本体への密着度が高いのはいずれ

の意識のゆれに求めるほかないであろう。

『三宝感応要略録』の目録標題と本文標題とに違いがあるばあい、『三宝感応要略録』の目録標題と本文標題とに違いがみられるものが一部にあることはさきにふれたとおりだ。ただし、なお、『今昔物語集』においても、目録標題と本文標題とに違いがみられるものが一部にあることはさきにふれたとおりだ。ただし、なお、『今昔物語集』においても、目録標題と本文標題とに違いがみられるものが一部にあることはさきにふれたとおりだ。ただし、なお、『今昔物語集』においても、目録標題と本文標題とに違いがある形態との一致がもたらしたもののようだ。なお、『今昔物語集』においても、目録標題と本文標題とに違いがあるばあい、『三宝感応要略録』の目録標題と本文標題とに違いがあるばあい、『三宝感応要略録』の目録標題と本文標題とに違いがあるばあい、『三宝感応要略録』に依拠している各話にあっては、当面、ことさら問題にすべき差異はない。

上5目・凝観寺法慶未畢釈迦像感応

造釈迦像死従閻羅王宮被還感応

しかし、『今昔物語集』が目録標題に通じるのは、そこまでだ。『今昔物語集』に主人公名が明示してある点は、目録標題に通じ[ | 今六12・震旦疑観寺法慶依造釈迦像得活語

完成であったことには関心を示していない。標題でみるかぎり、霊ことを説こうとしている。それに対して『今昔物語集』は、像の未重視し、未完成であるにもかからず、あらたかな霊験をあらわした『三宝感応要略録』の目録標題は釈迦像の未完成であったことをる。しかし、『今昔物語集』が目録標題に通じるのは、そこまでだ。

説明されている。 略録』も『今昔物語集』も、はなしの本体では像が未完成であったと たりは、本文標題と同じ路線だ。念のためにいうと、『三宝感応要 験をもたらした釈迦像は完成品であったと解されるはずだ。このあ

よって六12は、まごうことなき蘇生譚として再出発することになっ とっている。<死従閻羅王宮被還>を<得活>といいかえたときの 放棄し、本文標題にしたがって、霊験の内容を具体的に示す方法を 力点のおき方には微妙な違いがあるけれども、ともあれこの措置に 『今昔物語集』の標題は、像が未完成であることに触れることを

目録標題と本文標題との折衷型ということになろうか。 主述の形式にかたちをととのえた『今昔物語集』六12の標題は、

中6目・王氏感地蔵菩薩誦花厳偈排地獄感応 本・〇〇〇〇〇〇〇●●●●●

今六3・震旦王氏誦華厳経偈得活語

にしばしばみられるかたちだが、ここには述部がない。『今昔物語集 蘇生譚であることを標榜している。本文標題は『三宝感応要略録』 の標題は、ここで取り上げる五話のうちでは、もっとも目録標題に して堕地獄をまぬかれたとの立場をそのまま承けて<得活>とし、 『今昔物語集』は目録標題で示されているところの、花厳偈を誦

中20目·会稽山陰書生写維摩経除疾救亡親感応

— 今六3・震旦会稽山陰県書生書写維摩経生浄土語 

形態としては、『今昔物語集』の標題は目録標題に近い。 しかし維摩経を書写した結果についての認識が、両者では違って

きたるところを確認しておく。 いる。『今昔物語集』の本文をふまえながら、両者の差異によって

六38は、次の三段からなる。

①会稽山陰県の書生某は、 をおこして維摩経を書写したところ、願は成就した。 みずからの病を癒さんがために、 願

②維摩経の霊験あらたかなことを悟った書生は、亡き父母の苦

を救う目的で、さらに書写を続けた。父母はともに救われた

と夢で告げた。

③写経の功徳で書生は、 界に生まれたあかしだと貴んだ。 命終した彼の身は、金色にかがやいていた。人々は、金粟世 金粟仏土に転生するとの夢告をえた。

みずからの浄土への転生との三点を六38は伝えているわけだ。この 要するに、書写の功徳によるみずからの除疾と、両親の救苦と、

点は、『三宝感応要略録』も同様である。 い。三点をふまえて、総括的に維摩経の霊験を説くことをもくろん まず本文標題についていうと、これは霊験を具体的に示していな

に示し、特定の部分を-これに対して目録標題と『今昔物語集』の標題は、霊験を具体的 ―それも、それぞれ違った部分を重視して

近い。

だものとなっている。

い

は③を重視している。 目録標題が焦点を合わせたのは、①と②だ。一方、『今昔物語集 いずれも書写の功徳を説くはなしでありなが

『今昔物語集』の意図的な読み替えによるものだ。 ところで、六38にみられる『今昔物語集』の目録標題ばなれは 前者は抜苦譚を、そして後者は転生譚を志向している。

齟齬を生ずることさえある。 向がある。この結果、ときには標題とはなしの内容とのあいだに、 の行為が原話の標題にかかげられているばあい、それを排除する傾 『今昔物語集』にはもともと、肉親による、あるいは肉親のため

を付して列記する。 上6目・唐隴西李大安妻為安造釈像救死感応

つぎに、『今昔物語集』が排除した例を、原話の当該部分に-

上14目・并洲張元寿為亡親造阿弥陀像感応 今六13・震旦李大安依仏助被害得活語

今六18·震旦并洲張元寿造弥陀像生極楽語

上28目・温州司馬家室親属一日之中造薬師七躯感応

中31目・梓洲姚待為亡親自写四部大乗経感応 今六21・震旦溜州司馬造薬師仏得活語

今六45・震旦梓洲郪県張姚待写四部大乗語

にするものだ。〈除疾〉 から 『今昔物語集』が六38で、原話である『三宝感応要略録』 〈除疾救亡親〉を割愛したのは、こうした一連の操作と軌を一 はともかく〈救亡親〉は六38ならずとも排 の標題

除される状況にある

との関連だ。 じつは、六37もまた、書写の功徳による生浄土譚であり、

加えて、

六38には組織上、

〈生浄土〉

を求める条件がある。

「震日

并洲道如書写方等生浄土語」との標題がかかげられている。 〈生浄土〉へのこだわりを、六3の側から見よう。

ように、六37もまた、書写の功徳による生浄土譚にするために操作 六3が①②を捨てて③を重視し、生浄土譚に意匠替えをはかった

をしている。 すなわち、六37の原話である『三宝感応要略録』中16の標題は、

問題があることが知られる。 標題の趣旨だ。ところが、はなしの本体に徴すると、この標題には

〈聞いた〉功徳によって、主人公の僧が浄土に生まれたというのが

「并洲比丘道如唯聞方等名字生浄土感応」となっている。

方等経を

〈聞いて〉いたために死後三日を経て蘇ることをえて、写経等に専 つまり、こうだ。主人公の僧は、道心薄かったものの、

中16の標題に示されている「唯聞方等」は蘇生の間接的な契機であ ことになるのだ。

念する。そして彼は、その蘇生後の

〈写経〉の功徳で浄土に生まれ

るにすぎず、浄土への転生の直接の因ではない。

そのことに気付いた『今昔物語集』は、標題の

唯聞方等」

分を「書写方等」と改めるとともに、本文中の「造方等大集」を、 「方等大集経ヲ書キ供養シ奉ル」と改変した。

是正するためのものというよりは、六38と連動するためのものであ 六37のこのような措置は、『三宝感応要略録』 の標題の不適正を

[56]

るはずだ。

してや偶然の暗合などではありえない。 標題が操作されているのだ。けっして漫然とした改変ではない。 た。六38は六37と連接した〈生浄土〉譚にするために、それぞれの 要するに、六37は六38と連接した〈生浄土〉譚にするために、ま ま

もある。

六3の読み替えには、このような背景がある。

中49目・踏大般若経所在地離悪趣業感応

今七6震旦霊運渡天竺踏般若所在語 本・○○○○○○●●●●感応

変の主眼がある。 主人公を明示して、 目録標題にも本文標題にも、主部がない。そこで『今昔物語集』は 主述のかたちを体裁を整えた。ここに、標題改

趣業」を重ねるとわずらわしく、しかも、いかにも不体裁で、形式 明としての「踏般若所在語」とがすでにあるからだ。これに「離悪 取り込むことが困難になった。述部としての「渡天竺」と、その説 を尊重する『今昔物語集』の立場にそぐわなくなる。 『今昔物語集』のこの措置によって、目録標題の「離悪趣業」は、

中 -58目・唐玄宗皇自誦仁王経呪請天兵救安西感応

ばかりが浮き上がってくる。

今六9・不空三蔵誦仁王呪理験語 本·00000●000●●●●●●●000

形態をとっている。また、 『三宝感応要略録』の目録標題も『今昔物語集』の標題も、 両者はともに、 仁王経の功徳による霊験 主述の

『今昔物語集』の読み替え(上) ― 三宝感応要略録との関連において

譚だとの立場にたっている。

仁王経を誦した人物を玄宗皇帝だとするのと、不空三蔵とするのと の違いだ。これは、このはなしの主人公を誰だとみなすかの違いで こうした共通点はあるものの、両者にはきわだった違いがある。

が、目録標題は皇帝自身が誦したことを強調するため、本文標題に る。仁王経を誦した人物を玄宗皇帝だとする点は本文標題も同じだ 『三宝感応要略録』の目録標題は、玄宗皇帝へのこだわりをみせてい

はない〈自〉の語を備えている。

た。 ない。誦したのは、大臣の進言で皇帝に召し出された不空三蔵であっ ところが、はなしの本体には、玄宗皇帝が仁王経を誦した場面

が皇帝の意をうけたものであれば、皇帝が誦したと表現することに る本文標題の範囲までだろう。自録標題のように、ことさらのよう 不都合はない。げんに中55にも、そのような例がある。 に〈自〉を補うと実態からかけ離れすぎてしまい、皇帝へのこだわり のを、皇帝が誦したと表現しうるのは、〈玄宗皇帝誦仁王呪…〉とす しかし中8にたちかえっていえば、実際には不空三蔵が誦したも

れは影を落している。不空三蔵に仁王経を誦するよう要請する場面 影響をおよぼしたようだ。標題にではなく、はなしの本体の中にそ 目録標題に示された玄宗皇帝へのこだわりは、『今昔物語集』にも 『今昔物語集』は、 「玄宗自ラ香爐ヲ取テ持念シ」と、原話にな

それ

もちろん、現象としては不空三蔵が誦したものであっても、

い〈自ラ〉を補なっている。

わずか一語の異同ではあるが、〈自ラ〉が『今昔物語集』で添加さ

が相当だろう。 れたことについては、『三宝感応要略録』の目録標題がらみとみるの

六9の主人公に据えなおしたのには、理由があった。巻六巻頭の、 ところで、『今昔物語集』が中58を導入するに際して、不空三蔵を

いのだ。玄宗皇帝から不空三蔵への主人公の変更は、これまた、『今 はなしを位置させるためには、主人公は玄宗皇帝であってはならな 仏法伝来譚にかぶせるように配されている三蔵関連話の一群にこの

昔物語集』の組織上の要請にもとづく、必然の措置なのであった。

注 1

『今昔物語集』巻七第一話の錯誤から

現報譚から蘇生譚。

(日本文学研究 (日本文学研究

三〇号 二九号

九五・一) 九三・一一

3 同右

2

今昔物語集震旦部考 六章(勉誠社刊

[58]